


### 3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>( 1 ) 高温期の栽培管理 ( 共通 )</p> <p>( 2 ) ユリ類の高温対策と栽培管理</p>	<p>( 今月の作業のポイント )</p> <p>高温期の栽培管理 ユリ類の高温対策と栽培管理 トルコギキョウの高温対策と栽培管理 バラの高温対策と栽培管理 シクラメンの高温期の管理 台風対策</p> <p>ア 施設栽培では高温障害を受けやすいので、換気扇等を利用した強制換気を実施し、日中の施設内気温の上昇を極力抑える。寒冷紗等による遮光も効果があり、30～50%遮光を目安とする。遮光資材の展張は施設外や開放したハウスの肩と肩の間の平張りの効果が高く、展張時間は最長 10 時から 16 時の間とする。</p> <p>イ 細霧により葉温低下と気化冷却を行う。</p> <p>ウ 高温、乾燥時にはハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類等が多発するおそれがあるので、防除を徹底する。</p> <p>エ 採花は気温の低い早朝に行い、冷蔵庫内で水あげする。</p> <p>ユリ類は一般に栽培温度が高いほど発芽、開花が早まり、到花日数は短くなるが、花数や葉数、茎長とも減少し、切り花品質は著しく低下する。特に、花芽分化開始から発達初期段階(発芽後 30cm 程度まで)の栽培温度が高いほど花数は減少する。さらに、発蕾期の高温・乾燥条件は奇形花などの生理障害発生の要因となり、花蕾長 6 cm 程度までは特に障害を受けやすく、30 ではプラスチック(花飛び)が発生しやすい。従って、高温期には換気、遮光等による施設内の昇温防止と適切な水管理を心がけることが重要である。</p> <p>また、高温期植え付けの作型で問題となる葉焼け症は、展葉中の上位葉がしおれ、かすり状や褐変するため切り花品質を著しく低下させる。発生は、高湿度、カルシウム不足で助長されるといわれ</p> <div data-bbox="917 1630 1364 1944" data-label="Image"> </div> <p>写真1 プレ・ルテイン処理後の球根</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3) トルコギキョウの高温対策と栽培管理</p>	<p>る。特に高温期には地温の上昇により、上根の発達が阻害され地上部の生育のみが進み多発する。発生には品種間差が大きい が、発生しやすい品種では大球で多発する傾向にある。</p> <p>対策としては、定植後の上根の伸長を促進するために、球根を発根適温である 8 ~ 13 の冷蔵庫内に 2 ~ 3 週間おき、事前に芽出しと根原基形成を促進するプレ・ルーティング処理を行ってから植え付ける（写真 1）。なお、処理中の球根のパッキング資材には、湿らせたピートモスを利用する。</p> <p>定植床は事前に寒冷紗被覆やかん水を行うことで地温の低下に努め、定植後は敷きわらにより地温の昇温防止と土壤水分の安定化を図る。なお、生育初期はこまめにかん水し、定植時や花芽分化前後は遮光等を行って可能な範囲で適温管理に(15 ~ 25 )に努める。ただし、過度の遮光はブラスチング発生の原因となるので、遮光率は 50%程度までとする。また、高温障害が発生しやすい場合は葉温を下げるため、日に 2 ~ 3 回茎葉に軽く散水（細霧）する。</p> <p>トルコギキョウは、育苗期間中に平均気温 25 以上で、かつ夜温 20 以上の温度条件に遭遇すると幼苗がロゼット化する品種が多い。</p> <p>苗のロゼット化の回避には、は種後本葉 4 枚展開時まで、夜間のみ 15 で管理する 写真 2 冷房（クーラー）育苗 夜冷育苗や同時期まで育苗施設内の昼温を 25、夜温を 18 ~ 20 で管理する冷房育苗を実施する必要がある（写真 2）。最近では、種子を湿潤状態で 10 ~ 35 日間低温処理することでロゼット化が回避できる技術も普及してきており、一部の品種では利用が可能である。</p> <p>定植後、高温状態で管理すると上位葉の葉先が白ないし灰褐色に枯れる「葉先枯れ症」が発生しやすくなるので、施設サイドを開放して十分換気し、必要に応じて遮光率 35%程度の寒冷紗を展張する。葉先枯れ症の発生しやすい品種では、定期的にカルシウム剤を散布することで発生の軽減を図る必要がある。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(4) バラの高温対策と栽培管理</p>	<p>バラの施設栽培では、寡日照後の高温と強日射により葉焼けを起こしやすい。また、花蕾の発達後期に35 程度以上の高温に遭遇するとブルヘッド(奇形花)が多発する。</p> <p>対策としては、換気に努めるとともに、寒冷紗やアルミ蒸着ネット等を日中高温時の数時間展張し、室温の低下を図る。また、自走式防除機を活用したシリンジも効果的である。なお、高温、乾燥はハダニ類やスリップス類の発生が多くなるため、発生状況を確認し薬剤防除を徹底する。</p>  <p>写真3 アルミ蒸着資材による遮光</p>
<p>(5) シクラメンの高温期の管理</p>	<p>8月下旬までは、窒素濃度を30ppm程度に落とした液肥を4～5日間隔で施用し、葉色に注意しながらやや抑え気味に管理する。ただし、リン酸とカリについては十分に与える必要があるため、その含有率の高い置き肥を施用することで補い、花芽分化を促進させる。生育診断では、土壌から排出される硝酸態窒素濃度は20～30ppm、樹液濃度は25ppm程度を目安とする。</p> <p>また、8月は最も高温時期となるため、遮光資材(50～70%遮光)による被覆や換気を十分行い、施設内が30 以上とならないように心がける。なお、遮光による照度不足は葉、葉柄が軟弱になるので、鉢の間隔を広げることで受光面積を確保し、風通しをよくする。</p> <p>(7月の管理と基本的に同様)</p>
<p>(6) 台風対策</p>	<p>8月以降は上陸する台風も多くなることが予想されるため、台風情報に注意し以下の対策を講じる。</p> <p>ア 施設の周辺に防風網を設置して、風当たりを弱める。</p> <p>イ 被覆資材の破損箇所を補修するとともに、ハウスバンドを締め直す。</p> <p>ウ パイプハウスは竹材や直管で筋交いを入れ補強する。</p> <p>エ 風で倒伏した花き類は、放置すると茎が曲がるため、台風通過後は速やかに支柱やネットとともに起こす。</p>

(作成 農林水産研究所)